スナーク狩り

レイニーシュライン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スナーク狩り

【Ｎコード】
Ｎ１７１９Ｄ

【作者名】
レイニーシュライン

【あらすじ】
―――スナークを狩らなければならない。スナークを狩らなければならない。スナークを狩らなければならない。スナークを狩らなければならない。スナークを狩らなければならない。スナークを狩らなければならない……

（前書き）

この物語はルイス・キャロルのスナーク狩りの、作者の解釈を物語化したものです。
作中の「スナーク」「スナーク狩り」は作者の解釈および想像であり、「ゴドー」もまた同様です。
違う理解、解釈をお持ちの方もおられますでしょうが、平にご容赦ください。

＞1＜

「すまないが君、ここらでスナークを見なかったかね？」

薄暗い路地ばかりが並ぶ陰鬱なこの街で、霧の立ち込める早朝、僕はそんな奇妙な質問を受けた。その奇妙な質問を放った男もまた奇妙で、針金細工みたいにひょろりと細いくせに、重たげなリュックサックを背負って、それでも涼しげな顔だった。

「すまないが君、ここらでスナークを見なかったかね？」

男はぽかんと見返す僕に苛立つこともなく、静かにもう一度たずねてきた。

「あ、ああ、いや、なんだかよくわかりませんが、ここにはそういうのは来てないと思いますよ。僕はずっと長いことここにいますが、そういうのは聞いたことがありませんね」

「そうかね、ありがとう。しかしまったく、見当違いだったかな、いやいや、間違いないはずだ。地図にもしっかりとあるのだ、いずれはたどり着くだろう」

男はそんなことを、地図だという羊皮紙を眺めながらぶつぶつと呟き、さっと去っていってしまった。しかし驚くべきは垣間見えた男の地図がまったくの白紙だったということだった。経線も緯線も、等高線も土地の名前もない、実にシンプルで上質な地図だった。生憎と僕は海図以外でそんなものにお目にかかったことはない。さぞかし年季の入った、玄人なのだろう。

しかし結局、そのスナークとやらがなんなのかは、ぜんたいわかりはしなかった。

＞2＜

「ねえ君、ここらでスナークを見なかったかな？」

薄暗い路地ばかりが並ぶ陰鬱なこの街で、固いパンをかじる朝、僕はまたそんな奇妙な質問を受けた。その奇妙な質問を放った少女もまた奇妙で、というか少女と判断したのも声だけであってそもそもローブをすっぽりと着た上に、東洋を思わせる猿を模した白い仮面をかぶっていた。

「さっきもそんなことを聞く人がいたんですけどね、ねえ、そのスナークってヤツはなんです？　僕はずっと長いことここにいて、ここには妙なものは、さっきいった人以外来ていないと思うんですが、しかしスナークってヤツの姿かたちもわからないんじゃ、ちょっと答えられないですね」

「ああそっか、なるほど確かに、あたしみたいにスナークを探す人がいるんなら、君みたいに知らない人がいてもおかしくはないね。ようし、それじゃちょっと教えてあげようか」

少女はそう言い、がさがさと羊皮紙の束を取り出した。僕は長くなりそうだなと思ったが、彼女が止める前に語りだしたので、聞く他になかった。

「スナークとは、スナークなのよ。

申し分ない勇気、それだけがスナーク狩りには必要なの。

さて、スナークの特徴を５つ、ここに書いておいたわ。

これを心得ておけば、真正のスナークを見分けられるそうよ。

じゃあ順番に。

まずは味。気が抜けて味も無いけど、堅い皮がある。

ウェストの周りが窮屈すぎる燕尾服のようで、『鬼火風陽気』の香りがあるわ。

起きるのが遅い。まあでも、だいたい、することなすこと遅すぎる。
例えば午後のお茶の時間に朝食をとり、翌日になって昼食を取る始末。

第三に、冗談がすぐにはわからない。
あたしたちが何か冗談を言っても、悩んで哀願するようにため息をつき、
そして洒落には苦しそうな目つきをするの。

第四に、更衣室が好きなのよ。いっつもそれを持ち歩いている。
海辺の景色をきれいにすると信じているんだけど、疑問の余地ある見解よね。

そして第五に、野心家ってところ。

だからスナークを狩るなら、
とりわけフォークと希望で狩るといい。それに善良さと指ぬきで狩るといい。
鉄道株で残忍に脅かすといい。紙袋の中の微笑で誘うといい」
そこで少女は、まさにそいつが方法なのよ！　現代科学で言われてるように、スナークを分捕るにはそうやるしかないの！　と実に陽気に叫んだ。
「最後にスナークの種類。
口ひげで引っかくスナークと、羽があってかむスナークは、区別する必要があるわ。
普通のスナークは無害だが、無論そこには例外もある。
もしもあなたの前に現れるスナークがブージャムと判明したなら、心しないと。

ああ、いえ、心する間すらないかもしれないわ。
それがブージャムならばあなたは数秒の内に音もなく消えてしまうのだから。
あなたが何者であろうと、影すら残らないのだから」
まるで詩を朗読するかのようにそこまでキレイに語ると、少女は仮面の向こうからくるんとこちらを見つめて、もう一度たずねた。
「ねえ君、ここらでスナークを見なかったかな？」
「いやあ、知りませんね。少なくともいま聞いたスナークってのは、ここらじゃ一度も見かけたことがありませんよ」
「そう、ありがとう。でも残念だわ。地図にもしっかりとあるんだから大丈夫でしょうけど、うん、でも残念ね」
少女はそう残して、地図だという羊皮紙を眺めながら去った。驚くべきことにその地図も、早朝訪れた男が持っていたように、まったくの白紙であった。たった二人との遭遇ではあるが、スナークを探している人間というものは、どうやらよほどの人々なのだろうと推測される。

しかし、結局スナークなんておかしなものを探す理由は知れなかったが。

＞3＜

「嗚呼、すまんが、君、ここらでスナークを見なかったかのう」
薄暗い路地ばかりが並ぶ陰鬱なこの街で、昼飯前の読書中に、僕はまたまたそんな奇妙な質問を受けた。その奇妙な質問を放った老人もやっぱり奇妙で、南国風のハイカラなシャツに色眼鏡をかけ、そして手に持ったトランクを手錠でがっちりとつないでいた。
「もうこれで三人目になりますが、僕はずっと長いことここにいて、

でも、そのスナークってヤツは見かけませんね。実際問題、どんなものか聞いたけれど、どんなものかはいまだによくわからないんですが」
「ふむ、そうかね。それは残念だのう。じゃが地図にもしっかりあるし、いずれたどり着くじゃろう」
老人はそう言ってすぐに立ち去ってしまいそうだったので、僕は慌てて呼び止めた。
「あ、すみません、探し物の最中に悪いんですが、なぜその、スナークってやつを探すのかお聞きしてもいいですかね？」
「ふぅむ、そうだのう。君が何か手がかりを持っているかもしれんし、話してみても問題ないだろうなあ。よし、それでは教えてしんぜよう。儂はスナークを狩るために探しておるのだ。故に儂のことはスナーク狩りといってもいいだろうのう」
老人はひげのない顎をさすりながら、そう答えた。そういえば先ほどであった少女も、スナーク狩りと話の中で口にしていた。なるほどスナークを狩る人々なのか。しかしただ狩人と呼ぶには個性的な人々であった。やはり謎と敬意をこめてスナーク狩りと呼ぶべきだろう。
「では、あなたはなぜスナークを狩るんですか？」

「――――――――。」

一瞬、ぞっとするほどの静寂が僕の内部を駆け抜けた。けどやっぱり、相変わらずこの陰鬱な街は遠くからの喧騒が響いていた。その静寂は僕だけのものだった。だから僕は、その質問はしてはいけないものだったのではないかと恐れ始めていた。
「……あの、」
「いや、うむ。スナークは火をつけるのに役立つのだよ。だが勿論、追い求める理由はそれだけではない。スナークはスナークなのじゃよ。スナークはスナークであるからスナークなのじゃよ。故に儂は

スナークを狩るのだ」
　まるで説明になっていなかったが、僕は老人の視線に耐え切れず、俯いた。老人は僕から見ても明らかに冷たく、拒絶の意を表していた。僕の質問は、ある種致命的なものであったようだ。例えるならば、華やかなマジックショーで誰も彼もが歓声を上げるその最中に、どうでもいいというようなさめた一言でトリックを看破してしまうかのように。
　結局老人は、やはり白紙の地図を眺めながら立ち去っていった。
　僕はこの頃になってようやく、スナークという存在が彼らにとってどれだけ重要なのかを感じ始めていた。

＞4＜

「すみません、このあたりでスナークを見ませんでしたかね」
　薄暗い路地ばかりが並ぶ陰鬱なこの街で、昼食を終えた眠い時間、僕は四度そんな奇妙な質問を受けた。その奇妙な質問を放った青年は意外に極普通で、どこにでもいそうなありふれた顔立ちで、どこにでもいそうなありふれた服装だった。
「もうあなたで四人目になりますが、僕はずっと長いことここにいて、でも、そのスナークってヤツは見かけませんね。スナーク狩りというのも大変そうですね」
「あはは、私でもう四人目ですか。そうですね、確かに大変ですが、やりがいはありますね」
　青年は気さくに笑ってそう返してくれた。いままでの四人の中では、一番ぼくの気に入る性格だった。たとえそれが表向きだけであっても僕は別段困らない。
「あなたもスナークを狩っているんですよね？　違ったら申し訳な

いんですが」
「ええ、私もスナークを狩っていますよ。フォークと希望で。善良さと指貫で」
冗談めいた口調で彼は言ったが、先ほど少女にスナークの特徴を聞いていた僕は、実のところ彼もまた、他の人々のように実に真剣にスナークを狩っているのだということがわかっていた。
「ええと、先ほど来た人に聞いたら気分を悪くされたんですが……」
「なぜスナークを狩るか？　でしょう、きっと」
「……ご明察です」
「そしてきっと、火をつけるのに役立つとか、そう言われたんでしょう？」
「……またまたご明察です」
苦笑いしながら、青年はタバコを口にくわえた。しかし火はつけない。或いは禁煙中で、口元が寂しかったのかもしれない。
しかし返ってきた言葉はこれだった。

「スナークは、スナークなんです」

まったく意味不明だ。老人が繰り返したのと同じような言葉だ。或いは、口にすることもタブーとなっているのかもしれない。だとすると性懲りもなく質問する僕はかなり愚かだ。そんな僕の心情を悟ったのか、青年はいやいやと首を振った。
「別にはぐらかしているんじゃないんですよ。ただ、それ以外にうまく言葉が見つけられない。はっきりとそいつを口にしてしまうと何もかもが崩れてしまう、そういうことじゃ、確かに私たちにとっては禁忌ってことになるかもしれませんね」
「……はあ……」
「……そうですね、スナークってどんなのか知ってますか？」
「ええ、一応は、先ほど会ったスナーク狩りの少女に聞きましたけれど」

「五つの特徴、それに狩るのに必要なもの？」
「そう、それです」
「じゃあ、スナーク狩りについては？」
「え……」
　スナークというものがどんなものか、確かにそれは考えていたが、スナーク狩りという、スナークを狩る人々については何も考えていなかった。誰も彼も奇抜で、奇妙で、共通点など見当たらなかったし、ただ不思議な人々とだけ考えていた。
「スナーク狩りというものは、共通した価値観を持っているんです」
「その価値観というのが……スナークですか？」
「ある意味ではそうですね。スナークというのは探さないときにこそ見つかるものなんです」
「……は？」
「私たちスナーク狩りは、むしろいつか発見することを恐れています。どころか、発見と自分との間に柵さえ作っているのです。本当はスナークを探してなんかいない。いえ、それ以外のことならなんだってするのかもしれない」
「……ええと、いまいち意味がわからないんですが」
「それは、仕方がないかな。そういうものなんです。私自身、最近になってようやくそのことを認めだして……そしてようやく、諦め始めたのですから」
　青年は曖昧に笑って、タバコを戻した。結局吸わないようだ。もともと喫煙者ではなく、単なるポーズだったのかもしれない。まるで意味のないように見える行動というのは、実に彼に似合っている気がした。そう、それこそ彼の言う、諦めという言葉の象徴かもしれない。そして同時に、スナーク狩りの。
「じゃあ、私はもう行きます。もう、私のスナークが見つかるかもしれない。違うものを追えばいいのかもしれないけれど、私にはスナーク以外を追いかけることは出来そうにないですし」
「わかりました。それではさようなら」

「さようなら」
青年はそうして去っていった。彼の手元には真ッ白な地図の代わりに、走り書きの文字の書かれた羊皮紙が握られていた。なんとなく、彼のたびはもうすぐ終わるのだろうなと僕は思った。それは仕方がないことなのだろう。

＞5＜

薄暗い路地ばかりが並ぶ陰鬱なこの街で、日の沈み行く黄昏時に、僕は最後のスナーク狩りに出逢った。灰色のスーツに身を包み、灰色の髪をした、灰色の男は、路地裏に崩れるように座り込んでいた。その手にはぐしゃぐしゃの羊皮紙が握り締められていた。
「どうしました、具合でも悪いんですか？」
「違う……違うんだ……スナーク…スナークを……」
「ああ……これでもう五人目になりますが、ここでは見かけませんでしたよ」
「違う……見つけてしまったんだ」
男はスナーク狩りで、そしてスナークを見つけてしまっていた。自分と発見との間に作った柵を乗り越えて、ついに男はスナークを見つけてしまったのだという。
「でも……スナークだったんでしょう？　探していたんでしょう？」
「ああ、探していた……いや……それ以外のことなら何でもしていた……私は、わかっていたのかもしれない……スナークは、嗚呼、スナークは……」
「……まさか……」
「左様、スナークはブージャムだった」
男はもはや灰色にすら見える顔色をより一層悪くしながら、虚空

を見つめ続けていた。
　ブージャムというスナークは、見つけたものを消してしまうのだという。このただでさえ影の薄い男の、その影さえもしっかりと消してしまうのだという。
「私は、ブージャムを見つけてしまった。スナークを探すということは、そういうことだったのだ。スナークは、スナークだったのだ。スナーク狩りはみんな気づいていない。いや、気づかないようにしているんだ。私みたいに気づいてしまったものがスナークに気づいてしまう。そしてブージャムを見つけるのだ」
「なにを、何を仰っているんですか？　僕には何がなんだか、」
「わかるはずもない、わかるはずもないんだ。スナーク狩りでいるうちはスナークは見つけられず、探さないときにこそスナークは見つかる、スナークを見つけたときこそスナーク狩りでなくなるときだ。そしてスナークとは、ただの一度もスナーク狩りでなかったものには、わからないんだ。その意味はわかっても、実感は出来ないんだ」
「なんなんです、一体？　スナークって……スナークってなんなんです！？」
「私たちはスナークを探して走り回る。真ッ白な地図を、海図を手に何ヶ月も何週間も、走り回る。そうだ、スナーク狩りというのはそういうことで、スナークというのはそういうことだ。私たちはスナークを狩るためにスナーク狩りとなった」
　男は絶望したように訳のわからないことを重ね続けた。――――いや、或いは僕にはわかっていたのかもしれない。しかしそれに気づくことはなかった。僕自身はスナーク狩りではなかったが、しかしベクトルの違いだけで僕も確かに彼らスナーク狩りと決定的な、いや、致命的な、致命傷的な共通点があったのだから。
「私たちはスナークを狩るために何でもやった。スナークを狩ろうとすることはせずにね！　申し分ない勇気が必要だった。人はそれを勇気と呼ばないかもしれない、逃避と呼ぶかもしれないが、それ

でも私たちにはそれが必要だった。希望が必要だった。だがもうおしまいだ！　私はスナークを見つけてしまった。

左様、……スナークは……ブージャムだった！」

男はそれきり何も言わなくなった。

僕はただ黙って、何ヶ月も何週間もすごした路地に腰を下ろした。
僕はただ、ゴドーを待ち続ける。

終

（後書き）

解説がブログ「スナーク狩りにも雨は降る。」にございます。
興味のある方は是非そちらもご覧ください。
ＵＲＬはｈｔｔｐ：／／ｄ．ｈａｔｅｎａ．ｎｅ．ｊｐ／ｒａｉｎｙｓｈｒｉｎｅ／です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1719d/

スナーク狩り

2010年12月1日07時24分発行